

平成 29 年 10 月 19 日 (木)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 山村浩二さん WS 『略画式』と“夢”の表現について

1, 概要

山村浩二さん、3 回目のご来館です。山村さんのご関心をうけて、本日は次のような内容で進めることにしました。

- ①江戸時代に出版された絵のお手本について (木越俊介准教授)
- ②室町時代の文学作品の中での「夢」の描き方について (恋田知子助教)



2, 「画譜」を見る

江戸時代に出版された絵のお手本集を「^が画譜」といいます。『北斎漫画』が大変有名ですが、それに影響を与えたといわれている^{くわがたけい}鋏形蕙斎という絵師が描いた画譜が机にいくつも並べられ、木越先生から基礎的なレクチャーが行われました。

今回ご紹介した画譜の中には、略画 (省略して簡単に描いた絵) を集めたものがあります。絵を描く方法を伝えるための本であり、即座に絵が描けるようになる、という趣旨の広告文が載っていますが、山村さんによると、実は写實的に描くよりも略して書く方が難しいのだそう。そのため教員サイドからは、広告文は本屋が販売促進のために書いた建前だったのでは?! という意見が出てきました。

ほかにも、絵を描く専門家ならではの感想もたくさん出てきました。

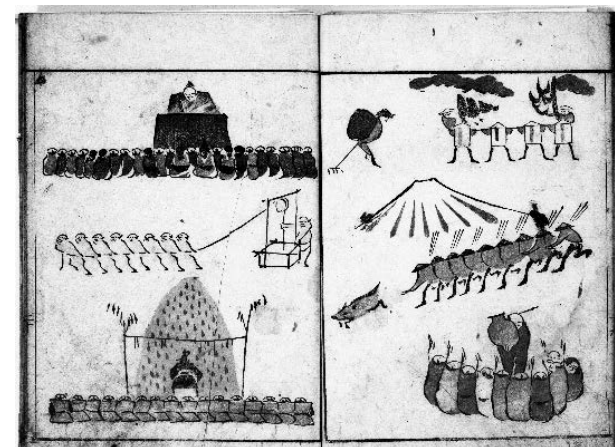


図
1



図 2

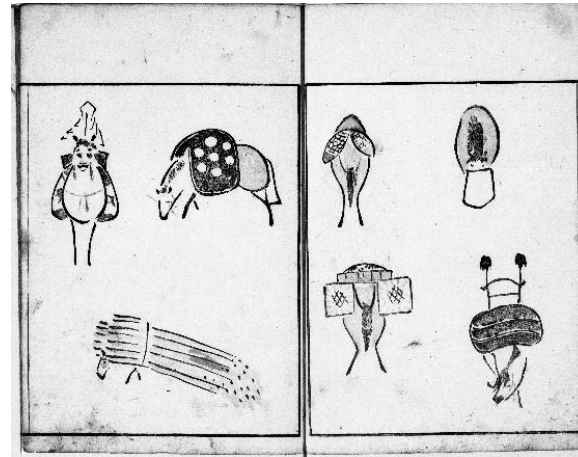


図 3

たとえば『人物略画式』¹をご覧になりながら、「蕙斎は女の人を描くのが苦手だったんじゃないか」と仰る山村さん。山村さんによると、写実的に描くよりも単純化して描く方が難しく、男性の絵（図 1）に比べて女性の絵（図 2）は、特に鬘の形あたりを細かく描いてしまっているとのこと。

さらに、『鳥獣略画式』²（図 3）について、動物の方が単純な線と点なのに生き活きと達者に描けています、というコメントも。

蕙斎の絵師としての成熟度に目を向けられたご指摘は、文学を専門とする私たちにとって大変新鮮でした。

3, 山村さん、作品の制作秘話を語る

略す方が難しい、というお話から、話題は山村氏ご自身の創作へと及びます。

たとえば蕙斎の表情豊かな動物たちを例に、自分の内側にあるものしかデフォルメできない、ということをお話しくださいました。

対象の本質を捉えるという言葉は、葛飾北斎が晩年に出版した絵手本³にも出てくるものです。山村さんの実感を伺ってみると、作り手には永遠の課題があるのだと、改めて思わせられました。

¹ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007682>

² <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007686>

³ たとえば『絵本彩色通』（1848 年刊）では、「山に山脈あり水に

水脈あり（中略）象をぬがく^{かたち}に万物自立ならざらんやされば岩に激^{いは}す^{げき}してくだくとも其^{その}けちみやく^{うしな}を失はざるを心にかけて画くべし」と、自然の本質を見極めて描き分けをするよう述べられている。

平成 29 年 10 月 19 日（木）

また絵本制作の過程や、作品の世界観を意識した画材の選び方等についてもお話をうかがい、普段知ることのない創作の世界を垣間見ることが出来ました。

4、「夢」の表現

山村さんより、文学に登場する夢に表現について関心があるとうかがっていたため、恋田先生からは『うたたね草紙』という巻物と、『ささやき竹』という奈良絵本⁴についてのレクチャーがありました。

これらの作品では、夢枕でお告げを得る場面が登場するため、その場面の描き方に注目が集まりました。

奈良絵本の中では、夢の中の人物が主人公とは異次元であることを示すために、よく雲と一緒に描かれたり吹き出しの中に描かれたりします。また、『烏帽子折』（京都大学蔵）という作品では、枕元に現れる夢を半透明に彩色しており、珍しいのだそうです。夢や幻が半透明で表現されることについて、各から様々な時代の作品が例に出され、活発な議論となりました。



⁴ 室町末期～江戸時代につくられた、濃彩絵入の写本。